

聖書：マルコの福音書 11：1～11

説教題：子ろばに乗る王

日時：2026年2月15日（朝拝）

イエス様はいよいよ今日の箇所ではエルサレムの都へと入られます。その際、まず子ろばを調達されたことが最初に書いてあります。オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニアに来られた時、イエス様は二人の弟子にこう言われました。2～3節：「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどこいて、引いて来なさい。もしだれかが、『なぜそんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐに、またここにお返しします』と言いなさい。」 読んだ瞬間、ミステリアスな感じがします。これは一体どういうことなのか。なぜイエス様は、事がこのように進行するのを知っておられるのか。この理解の仕方には主に三つの見方があるようです。一つ目はイエス様が事前に準備しておられたとする見方です。前回エリコを出発した時の様子が記されましたが、そこからエルサレムに入るまでの間に、あのマルタとマリアの兄弟ラザロがよみがえった出来事があったことがヨハネの福音書 11章から分かります。イエス様はその時、エルサレム郊外の村ベタニア周辺に数日滞在されました。その間にこの子ろばの手配をしておられたのではないかと。そして「主がお入り用なのです」という言葉は、そのための合言葉、いわばパスワードのようなものだったのではないかと理解です。二つ目はイエス様はこれまでも何度かエルサレムに来られており、その周辺にはイエス様に心寄せる人々がいたという見方です。今回特別に予約をしていなかったとしても、「主がお入り用なのです」、つまり「主イエス様が必要としています」と言えば、喜んで協力する人たちがいた。そのことが前提としてあって、その上でイエス様が不思議なみわざを行われたという理解です。三つ目はこれは全くの超自然的なみわざであるという見方です。向こうの村に行けば、まだ誰も乗ったことのないろばがつながれていることをイエス様は予見された。そしてその持ち主の心もイエス様が支配され、「主がお入り用なのです」と言えば進んで協力してくれるよう、その人の心を動かされたと見る見方です。どれが本当だったのか、結論を下すことは難しいようです。学者たちの意見も別れていて、せいぜい、この中の○番目の立場が最も可能性が高いだろうと述べる程度です。しかしはっきりしていることがあります。それは、この子ろばの調達に当たってはイエス様が主導権を取られたということです。たまたまそこにろばがあったから乗られたのではありません。エルサレムに入るにあ

たり、どうしても必要なこととして、イエス様ご自身が子ろばを備えられたのです。そしてそれに乗ってエルサレムへと入って行かれました。ここにはどんな意味と目的があったのでしょうか。

マルコの福音書ははっきりと引用の形では記していませんが、これは旧約聖書のゼカリヤ書 9 章 9 節と関係することです。そこではこう言われていました。「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」これはやがて遣わされるメシアについての預言でした。その成就がここに起こったということです。つまりイエス様はここで、ご自身こそ約束のメシアであることを明らかにされたということになります。これまでイエス様はご自身がメシアであることを言い広めないようにと命じて来られました。それは当時の人々の間にあった誤ったメシア像——特に武力的メシア、政治的メシアといったメシア像——を助長しないためでした。しかしいよいよご自身をはっきり表すべき時が来ました。イエス様は贖いの舞台エルサレムへと入られます。その時に、この行動を通してご自身こそ旧約聖書が約束していたメシアであることをはっきり示されたのです。

しかしただそのことを示されただけではありません。ここには大切なメッセージが伴っています。普通、王はどんな乗り物に乗ると考えられるでしょうか。当時であれば力強い馬や、軍馬が引く戦車を思い浮かべるでしょうか。しかしイエス様が乗られたのはろばでした。しかも若い、子ろばでした。いかにも弱々しい姿です。こんな子ろばに乗ってエルサレムに入る姿は、世の基準からすれば威厳ある王の姿とは程遠いものだったでしょう。あるいは恥ずかしく、滑稽で、冷笑の対象にさえなり得る姿だったかもしれません。けれどもそこにこそ大切な意味があります。先ほど読んだゼカリヤ書 9 章 9 節に、やがて来る王について「柔和な者で、ろばに乗って」とありました。この「柔和な」という言葉には印が付いていて、欄外を見ると、あるいは「へりくだった」とあります。すなわちこの王はへりくだった王、心の低い王なのです！この世の王とは対照的です。イエス様は 10 章 42～45 節で、この世の支配者は「人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています」と言われました。彼らは自分たちが持つ力を誇示し、上から押さえつける仕方で支配します。しかし神の国のリーダーは違うと言われました。神の国の指導者は仕えることによって治めるのだと。そしてその模範として、ご自分は多くの人を罪とさばきから贖い出す

ために、その代価として自分のいのちを与えるために来たと言われました。まさにそのような方であることが、この子ろばに乗ってエルサレムに入る姿に象徴されています。そしてこのようにしてこそ、先ほど読んだゼカリヤ書9章9節に続く約束が実現します。ゼカリヤ書9章10節：「わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓も絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る。」 世の王はここで言われている「戦車」や「軍馬」や「戦いの弓」を用いて自分の王国を築き上げようとします。まさに「力による平和」を目指します。しかしその平和は一時的で、表面的で、長続きしません。まことの王はそれらを絶えさせます。しかし、子ろばに乗る王を通してどうしてそんなことが起こり得るのでしょうか。それは何よりも、このまことの王イエス様の十字架を通して神との平和という最も根本的な平和が勝ち取られるからです。そしてその神との平和に基づいて、人々の間にも、横の関係にも平和は広がって行きます。「その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る」と言われています。それは全世界、全宇宙にまで及ぶものです。今まで存在しなかったような平和です。そういう平和をもたらす王としてイエス様はろばに乗ってエルサレムへと入って行かれたのです。

さてこうしてエルサレムへ進もうとされるイエス様を見て、弟子たちは自分たちの上着をろばの上にかけて、その上にイエス様は乗られました。鞍の代わりです。さらに多くの人々も、自分たちの上着を道に敷き、他の人たちは葉の付いた枝を野から切ってきて敷きました。彼らは王としてご自身を示しておられるイエス様に敬意を表します。そして叫びました。9節の「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に」という言葉は、詩篇118篇25～26節の言葉で、もともとはエルサレムに巡礼を来る人々を祝福する言葉だったようです。それがここではイエス様に当てはめられ、メシアとして来られた王を賛美する言葉として用いられています。ホサナという言葉は「今、お救いください」という意味の言葉ですが、当時は歓喜の叫びとして用いられており、「ハレルヤ」に近い響きを持つ賛美の言葉となっていました。そして10節にはダビデの子としてのメシアの到来を喜び迎える言葉が続きます。ダビデの子なる方の国が今こそ現れるとの期待が込められていました。彼らの思いの中には地上的な、政治的なメシアへの強い期待があったことでしょう。

こうしてついにエルサレム入城が実現します。それが11節です。しかしここを読むと、どこか拍子抜けしたような印象を受けないでしょうか。さあ、エルサレムに入

って何が起こるのかと身構えて読むと、何も起こらない。特別な騒ぎもありません。イエス様はその後、弟子たちと一緒に都を出てベタニアへ向かわれます。おそらくマルタとマリアの家です。そこから都へ通われたと考えられます。しかし 11 節で重要なのは、イエス様が単にエルサレムに入られただけでなく、「宮」すなわち神殿に行かれたことです。そして「すべてを見て回った」とあります。これは観光目的で見て回ったという意味ではありません。これはエルサレムに入城したまことの王が、ご自分の領地を視察されたということです。神の御心になつた礼拝と生活が行われているかどうか確かめられたのです。そしてその結果として翌日、一般に「宮きよめ」と呼ばれる出来事が起こります。イエス様はエルサレムのさばきを宣言し、宮で売り買いしている者を追い出したり、商人たちの台や腰掛けを倒されます。非常に激しい行動です。つまりそれは突発的な怒りではなかったということです。前日にまず良く見て、状況を確認した上での行動でした。王が来られたということは、そういうことをも意味します。真の権威を持つ方として義をもって統治されるのです。11 節が静かに終わっているのは、いわば嵐の前の静けさと言えるかもしれません。それはこの後に起こることの準備でもあったのです。

以上の箇所から三つのことを心に留めて終わりたいと思います。一つは、イエス様はゼカリヤ書が預言した柔和な王、へりくだった王として、子ろばに乗ってエルサレムへ入られたということです。これは先に見た通り、私たちのために身を低くし、十字架にかかって私たちを救い出す王として来られたことを象徴するものです。イエス様はこの最後のエルサレムへの旅において激しい内的な戦いを覚えておられたことがこれまでのところに伺えました。特に 10 章 32 節では、イエス様が弟子たちの先に立って進まれ、弟子たちも人々も驚き、恐れを覚えたと記されていました。同じ様子はルカの福音書 9 章 51 節で「イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた」と記されていました。これは直訳すれば「御顔を固定した」という意味の言葉で、そうでもしなければ横を向いてしまいたい、別の道を選びたいという誘惑と戦いながら、ご自分の使命である十字架の身代わりの死へとまっすぐ御顔を固定し、決然と進まれた様子を示しています。そのイエス様がついにエルサレムまで来られました。そして自らろばに乗り、身を低くする者・仕える王・十字架上でご自身のいのちまでもささげる王としてのご自分を示してくださいました。エルサレムへの道から逃げないで、ついにこの都に到着し、子ろばに乗って進まれた王を仰ぎ見て、私たちはひれ伏して感謝し、心からの礼拝をささげたいと思います。そしてこの王がくださ

るまことの平和の支配に生かされる者でありたいのです。

二つ目として、イエス様は仕える王として都に入られました。だからと言ってこの方を「何をしても無害な王」「無視できる王」と考えてはならないということです。イエス様は弱々しくて何もできない王ではありません。最後の 11 節は嵐の前の静けさとも言えるような場面です。この視察に基づいてイエス様は翌日、宮きよめを行い、エルサレムへのさばきを宣告し、指導者たちの罪を暴いて行かれます。イエス様はいのちまでささげて私たちの救いのために仕えてくださる王ですが、その恵みを退け、神の御心に逆らい続ける者に対しては、さばきを下す権威を持つ王でもあります。究極的には、それは主の再臨の日に明らかになります。イエス様は後に 13 章 26 節で「そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます」と言われます。差し出されている恵みが大きければ大きいほど、それを退ける者の責任は重大となります。そのような王であることを覚えつつ、私たちはこの後に続く王の言葉と行動を良く見つめる者でありたいと思います。そしてもし罪を示されるなら、悔い改めて、救いのために来られた王の恵みにすがり、その恵みの支配に生かされる者とされたいのです。

三つ目は、子ろばに乗って来られた王なるメシアの国こそ永遠に続く国であるということです。イエス様の子ろばに乗って入城された姿は、世が王に期待する姿とは大きく異なるものです。イエス様はその姿をもって、ご自身が軍事的・政治的メシアではなく、ゼカリヤの預言に沿って理解されるべき王であることを示されました。そしてそのゼカリヤ書では、この王の国こそ、それまでの「戦車」や「軍馬」や「戦いの弓」をもって支配する国々を終わらせ、それに取って代わる永遠の平和をもたらす国となることが語られていました。そしてそれは確かにそうなっています。かつて世界を圧倒的な力で支配したローマ帝国は、今どこにあるでしょうか。それはすでに過去のものとなり、消え去りました。その一方、子ろばに乗る王は当時弱々しく見えたかもしれませんが、その国は今なお続いています。主イエスがエルサレムで成し遂げられた十字架と復活に基づく国は、この世のどの国よりも長く存続し、今もなお世界の多くの人々を加えながら広がり、やがて最終的な完成に至ろうとしています。「彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る」とゼカリヤ書で言われた通りです。世はこの子ろばに乗る王を弱々しい姿と見下し、取るに足らないものとして気にも留めず、無視するかもしれません。しかしこの子ろばに乗る王

の御国こそ、いつまでも続き、決して消えゆくことがない、永遠に立つ唯一の王国です。私たちはその視点に立ち、この子ろばに乗られたイエス様を、神が遣わして下さったまことの王として見つめ、信じ、感謝し、従う者でありたいと思います。そしてこの世においても、この方が与えてくださる平和を日々味わいつつ、最後の完成の日を望み見て、喜びをもってこの王に従い、いつまでも続く恵みの国、平和の国を証しする御国の民の歩みへ導かれて行きたいと思います。